

## シュレーバーの教育理論(5)

——シャッツマンの『魂の殺害者』——

### Education Theory of D.G.M. Schreber (5)

——M. Schazman; Soul Murder——

石橋 武彦

Takehiko Ishibashi

(承 前)

今回の研究は、シュレーバーの教育に対してシャッツマンが『魂の殺害者』において加えた批判を吟味した、第4部につづく第5部の論文である。

息子シュレーバーの『回想録』における「奇蹟」に対するフロイトの分析(診断)は、息子シュレーバーのパラノイア説であった。本稿は、前回の継続として、④同性愛的衝動亢奮、⑤同性愛的妄想から迫害妄想への転換、⑥迫害妄想から誇大妄想への発展、⑦父(神)に対する精神的奮闘、⑧息子シュレーバーの欲求不満などフロイトのパラノイア説の説明が前半になる。

後半は、小此木氏とM. ローベルの息子シュレーバーに対する分析であってこれらは、前述のフロイトの息子シュレーバーのパラノイア説に対する批判でもある。

#### ④ 同性愛的衝動亢奮

いよいよフロイトが、シュレーバーの発病(1893年)について、父に対する同性愛的衝動亢奮が基本的役割を演じていることについて説明を加える段階にきた。

此の見解を裏付けるものは詳細な病歴の検討である。……ところが此のような詳細は、非常に注目すべき価値を持つものであるにも拘らず、通常は少しも検討されないで、説明されないままにされているものである。……その後、病気の経過にとって決定的な意味をもった「精神錯乱」が患者に起った。

丁度それは、彼の妻が一寸具合を悪くして短期間の保養に出かけていた間のことであった。……彼女が4日間家を留守にして家に戻った時、彼女の夫は悲しみの余りすっかりしよげ切ってしまっていて、彼女にさえ会いたがらなかった。「私の精神的崩壊に決定的な打撃が与えられたのは、私が一晩に異常な回数に遺精をした晩だった」。此の事実からわれわれは、次のようなことを理解することができる。すなわちシュレーバーは、絶えず妻に付き添われていることによって初めて、自分を取り巻く男達の誘惑から守られていたのである。そして成人の遺精というものが何等かの精神的因子の関与なくしては起り得ないと考えるならば、われわれはその晩の遺精が、無意識に活動していた同性愛的な空想に刺戟されたと推定することができる。

此のような同性愛的リビドーの爆発が、何故此の患者に、丁度あの時、つまり任命と転任との中間状況に起ったかは、彼の経歴を詳しく識らなければ推測することはできない。一般に人間は、一生の間、絶えず異性愛と同性愛との間を動揺し、一方の挫折や失望が彼を他方へ押しやるものである。

シュレーバーの場合、このような要素については何も判っていない。

しかし、われわれは、身体的因子に注目することをおろそかにするつもりはない。

此の因子はたしかに非常に注目し価値するものだからである。シュレーバー博士は此の発病の時51歳だった。彼は性生活にとって危険な年齢にあった。つまり彼は、一般に女性の場合だったら性欲が一時的に亢まる時期を経て、次いでその性的機能が後退の一途を辿るあの時期にあったのである。しかも男性にとってもこの時期

が全く問題にならないというわけではない。すなわち男性にも、「更年期」がそれに続く発病の素地をなす場合があるわけである（『症例の研究』、フロイト、小此木啓吾訳、日本教文社、155～156ページ）。

息子シュレーバーの精神的崩壊に決定的な打撃が与えられたのは、妻が家を留守にした夜の異常な回数に遺精をしたことであると告白している。妻が留守をした晩、同性愛的空想に刺戟されて、そのリビドーが爆発した。たまたま、当時の息子シュレーバーは、51歳（1893年）という男性にとっても危険な年齢にあったと、フロイトは説明している。

もち論、その同性愛の対象は、はじめ父シュレーバーに向けられていた。偉大な父シュレーバーに対して父親コンプレックスをもち、父による去勢威嚇によって父に対する反抗心を抑圧し、むしろ女性になって父に愛されようという妄想を抱いた。この同性愛の対象が、のち（1893年6月以降）には、主治医のフレヒジヒに向けられるようになる。これが被害妄想形成の第1段階であるという。

#### ⑤ 同性愛的妄想から迫害妄想への転換

次は被害妄想形成の第2段階である。「私は彼を愛していない」「私は彼を憎む」である。

主治医に対する同性愛的傾向が抑圧され、愛着が憎悪に変る段階である。そして被害妄想形成の第3段階として1895・6年の頃から、この葛藤と和解するために、彼の迫害妄想は宗教的な色彩を帯びた誇大妄想へと変化していく。

主治医フレヒジヒを対象にしたところの女性的（受身的・同性愛的）願望空想の出現が此の患者の発病の契機であったという仮定に、われわれがこれ以上に反対する必要がないと私は考える。何故ならば主治医に対して、シュレーバー自身の人格の側から激しい抵抗が起ってきたからである。そして、恐らくは他の形でなら防衛に成功したかも知れない此の抗戦が、われわれに知られていない事情から、迫害妄想の形を選んだのである。今や、愛着していた人物が迫害者に一変し、願望空想の内容が迫害の内容となった。われわれの推測では、このような図式的な理解は未だ他の迫害妄想の場合にも当てはまるように思われる。しかしシュレーバーの症例が他の一般症例と違うところは、彼の妄想の辿った発展状況と、その発展過程に伴って彼の妄想が受けた変化である。

此のような変化の一つとして、フレヒジヒの立場により高い人格たる神が置き換えられた点が挙げられる。初めその置き換えは、かえって初めのうちは葛藤の熾烈化、耐え難い追跡感の激化を意味するように見えるが、間もなくそれは第2の変化と同時に、葛藤の解決の役割を果していることが判ってくる。もしもシュレーバーが医者フレヒジヒに対して女になり、淫売婦の役割に置かれることを受け容れていなかったならば、自分を神自身の性的快楽の餌食として捧げるという課題も、自我の抵抗によって同じような反抗を受けたことであろう。脱男性化はもはや侮蔑ではなく、「世界秩序に即した」ものとなり、大きな宇宙的な法則に結びつき、没落せる人間界の新しい創造という目的に役立つのである。「シュレーバーの精神から生れた新しい人間たち」は迫害妄想に苦しむ此のシュレーバーを自分たちの祖先として敬うだろう。このようにして2つの互いに相剋し合う部分の葛藤を共に満足させる妥協形成的な回答が見つかったわけである。すなわち誇大妄想によって自我は償われたが、同時に女性的願望空想も満たされ患者の自我に受け容れ得るものになった。此のような妄想の発展によって精神的な葛藤も病気も一応は停止するかもしれない。その結果現実への顧慮が回復する余裕はできたが、同時にその解決は現在より遠い将来に延期され、いわば暫定的な願望充足で満足しなければならなくなった。女性への転換は、恐らく何時かは実現されるのであろうが、その時がくるまではシュレーバー博士の人格は崩壊しないで保たれるであろう（『症例の研究』、フロイト、小此木啓吾訳、日本教文社、158～159ページ）。

#### ⑥ 迫害妄想から誇大妄想への発展

迫害妄想から誇大妄想への発展は次のようにして起った。フロイトは説明する。

まず、自分が強大な力の持主から迫害されていると妄想する患者は、この迫害を誰かに告白したいと感じる。次に、自分こそ、そのような強大な迫害に相当する偉大な人物であると誇大妄想に陥る。息子シュレーバーは、フレヒジッヒを神へと飛躍させることによって、自分を世界秩序に即した宇宙的人物とみなすにいたった。

ところで、息子シュレーバーは、都合よく迫害と和解できるような誇大妄想を何処からみつけてきたであろうか。フロイトは、その手がかりを息子シュレーバーの『回想録』に求める。それによると、息子シュレーバーの迫害者がフレヒジッヒと神とに分裂する。

フロイトによればこの分裂は、フレヒジッヒと神とが同一視されていることに対する妄想的反応であると説明している。

迫害妄想から誇大妄想が発展することは、精神病学の教科書でしばしば言われていることである。それは次のようにして起ると言われている。——まず最初に、自分が強大な力の持主からの迫害の対象となっているという妄想を呈した患者は、この迫害を告白したいという欲求を感じ、次に、自分こそそのような迫害に値する偉大な人格だという考えに陥る。そこで誇大妄想は、E・ジオーンズによって適切にも「合理的」と名づけられたような精神過程によって喚起されると考えられている。しかしながら合理化の過程そのものに妄想を喚起するだけの感情の一貫性が存在すると信ずるのは、いささか非心理的な考え方である。それ故、われわれは教科書的な考え方とわれわれ自身の考え方をはっきりと区別したい。何もわれわれは誇大妄想の源泉を知っているなどと主張するつもりはないのである。

さて、シュレーバーの症例に戻ると、これ以上われわれが彼の妄想の変化を解明しようとするとは異常な困難に直面せねばならないことを告白しなければならない。フレヒジッヒより神への飛躍は、いかなる筋道を通して、またいかなる手段によって行われるのか？ 都合よく迫害と和解できるような誇大妄想、つまり分析的に云えば、抑圧された願望妄想の意識化を赦すような誇大妄想を、一体彼はどこから見つけて来たのか？ ここでまずわれわれに一つの手がかりを与えるのが『体験記』である。それが示すところによれば、患者にとって「フレヒジッヒ」と「神」とは同列の存在である。……迫害者がフレヒジッヒと神とに分裂する……此のような分裂は、パラノイアの特徴である。……此の分裂は実はフレヒジッヒと神の両者、或いはその属性のすべてが同一のものとして同一視されていることに対する妄想的反応として了解せねばならない。……假りに迫害者フレヒジッヒが嘗て愛された人物であったとすれば、神もまた同じように嘗て愛されたもう一人の人物いやむしろもっと重要な人物の再現に過ぎない(『症例の研究』、フロイト、小此木啓吾訳、日本教文社、159～161ページ)。

以上のようにフロイトは、息子シュレーバーにとり、フレヒジッヒという愛の対象が迫害者と変り、さらにそれがいかなる道筋を通して神という誇大妄想にまで発展したか、つまり、自己愛神経症に関する被害妄想の症状形成構造を説明している。結局息子シュレーバーの妄想が、パラノイアの特徴である分裂現象により、フレヒジッヒと神の両者、或いはその属性のすべてが同一視されていることに対する妄想的反応であると解しているのである。

#### ⑦ 父(神)に対する精神的奮闘

次にフロイトは、息子シュレーバーの妄想と彼の父との関係について述べている。この関係については、しばしば述べてきたように、M.シャッツマンは、父が息子シュレーバーの幼時に施した教育の影響が妄想を構成したことに強く固執している。

フロイトが父親との関係を論じるのは、これが、最初である。

患者が……頑強に抵抗した女性的空想の根源は、父と兄弟に対する憧れの性愛化の増大にあったと思われる。そのような父・兄弟関係のうち、兄弟に対する憧れが医師フレヒジヒに対する転移に置き換えられ、一方父への憧れが神に転移されることによって、精神的葛藤は、一応の解決を得、精神内界の平衡が回復されたのであろう。

もしわれわれがシュレーバーの妄想の中に父親も組み入れられるのが当然だと考えるならば、その介入はわれわれの理解を促進し、われわれが妄想の詳細を説明する試みを助けるに違いない。われわれがシュレーバーの神、シュレーバーと神との関係に、どんな特異性を見出したかを思い出してみよう。それは尊敬に満ちた絶対的な服従と冒瀆的な批判や暴動的な反抗のおどろくべき混合であった。フレヒジヒの誘惑的な影響にさらされた神は、経験から何ものをも学ぶことができなかつたし、生きた人間について何も知るところがなかつた。何故なら神は、死体を相手にするよりほかに能がなかつたからである。また神は、その力を一連の奇蹟において顕現したが、それらの奇蹟は大変風変わりなもので、むしろ深みのない、ばかばかしいものであった（『症例の研究』、フロイト、小此木啓吾訳、日本教文社、162～163ページ）。

フロイトは、息子シュレーバーの父親に対する態度は、息子シュレーバーと神との関係と同じであるとしている。

息子シュレーバーと神の関係といえば崇拜に満ちた絶対的な服従と暴動的な反逆を含む。一方においては崇拜し、一方においては、批判の対象となる奇妙な神である。

すなわち、息子シュレーバーにとって父は、崇拜に満ちた服従の対象である神であり、他方では、生きた人間を少しも理解しない上に、不合理な奇蹟を行う神であった。

特に奇蹟のような不合理性は、夢の中で嘲笑や侮蔑を表現するのがパラノイア患者の特徴であったから、この神は、侮蔑と嘲笑の表現目的を充たす存在であった。

幼児期における少年シュレーバーの父親に対する態度は……シュレーバーと神との関係において見出されるのと同じような崇拜に満ちた服従と反抗的な反逆を含み、彼と神との関係の寸分違わぬ原型そのものである。

しかもわれわれは、シュレーバーの父が医者、しかも名声高く、患者たちからも尊敬された医者であったという事実から、シュレーバーが自分の神を批判し、それについて指摘したところの、あの非常に奇妙な神の特徴を理解することができる。一体此のように立派な医者に向って、生きた人間を少しも理解していないとか、死体を相手にすることしか能がないなどと非難する以上にひどい侮蔑の言葉があるだろうか？ 奇蹟を行うことは、たしかに神の本性の一部である。しかし医者といえども、彼を崇拜する被保護者たる患者たちが噂するように、奇蹟を行い、奇蹟的な治療をやつてのける。まさに患者は、心気症にかかることによって此のような奇蹟的な治療を行う材料を医者（父）に提供したことになる。それにも拘らず此の奇蹟（治療）が頼りなく不合理で、時にばかばかしい結果にさえ終わったとするならば、われわれは次のような『夢解釈』の主張を思い出すであろう。即ち「不合理性は、夢の中で嘲笑や侮蔑の意味を表現する」と。ところで此の主張は、パラノイアの場合にも、やはり同様の表現目的を充たすのである（『症例の研究』、フロイト、小此木啓吾訳、日本教文社、164ページ）。

ひき続き、フロイトは、息子シュレーバーの発狂にいたる経緯について、『回想録』の中から父親コンプレックスを手がかりに説明を試みている。

フロイトによれば、前述のように息子シュレーバーにとって、フレヒジヒとの戦いが神との葛藤であるとするならばこの葛藤を愛する父との幼児期の葛藤に翻訳する必要があるという。一般に幼児体験の中では、きまって父親は子供の満足の妨害者とみなされる。その場合、現実的満足が妨害挫折されて、空想中で何らかの代理満足によって代償されるものである。息子シュレーバーの場合、幼児性欲的な衝動は、神の意志に基づく信仰的行為となり、神（父）自身に

さえ、性的快楽を求めてやまない。恐ろしい父の威嚇に対して、最初は、反抗したが後には、女性に転換したいという願望空想に変わった。

ところが、それがフレヒジツヒという、代理形成によって代理満足するにいたったという。

此の患者(シュレーバー)の場合、父に対する幼児期の態度は2つの段階を経過していた。父の存命中は徹底的に反抗し眞向から争った。ところが父が死ぬと直ぐに、父に対する奴隸的屈従と死後の従順に由来する神経症が起ったのである。

従ってわれわれは、シュレーバーの症例においても、父親コンプレックスというわれわれに熟知された材料を手がかりにして了解をすすめることができるかもしれない。

此の患者にとってフレヒジツヒとの戦いが実は神との葛藤であることが明らかであるとするならば、われわれは此らの葛藤を、愛する父親との幼児期の葛藤に翻訳しなければならない。即ちわれわれに未知な幼児期の葛藤の詳細が、妄想の内容を規定しているわけである。……一般に幼児期体験の中では、きまって父親は子供が追い求める殆どすべての自体愛的満足の妨害者と見なされる。そして此の満足は、その後には空想中であり面目を傷けないような何らかの代理満足によって代償される(『症例の研究』, フロイト, 小此木啓吾訳, 日本教文社, 168~169ページ)。

フロイトは、息子シュレーバーの幼児期体験特に子供の自体愛満足の妨害者とみられる父親の威嚇を妄想の原因としてとらえているのに対し、シャッツマンの解釈は、同じく息子シュレーバーの父親に対する幼児期体験を妄想の原因として重視するが、フロイトのように父親を自体愛満足の妨害者とはみていない。フロイトの場合は、この自体愛を息子の父親コンプレックスによって説明しようとしている。すなわち、息子シュレーバーが女性性に向う強い本能素質(女性転換)をもち、去勢不安に脅かされ、父への敵意や男性らしさを放棄し、父に愛されようとする退行的な願望をもち、同性愛的傾向が強まっていく。しかし、父シュレーバーや息子シュレーバーを取りまく環境はその願望の達成を妨害した。やがて父との同性愛的願望は和解が一旦成立する。しかし息子シュレーバーを取りまく家庭環境は彼の願望を妨害しつづけ、ついには破局を迎える。

シュレーバーの妄想は、それが最後に到達した発展形態においては、幼児性欲的な衝動が赫々たる大勝利を収め、性的快楽は神の意志に基づく信仰的行為とななり、神(父)自身さえ、患者に性的快楽を求めて止まないことになる。恐ろしい父の威嚇こそ、最初は反抗し闘われたが後になって受け入れられることになった女性に転換したいという願望空想に空想形成の素材を与えたものである。「靈魂の殺害」という代理形成(置き換え)によって隠されていた罪悪感が次第に明らかになったのは当然のことである(『症例の研究』, フロイト, 小此木啓吾訳, 日本教文社, 169ページ)。

さらにフロイトは息子シュレーバーの父親コンプレックスについて、同性愛的空想との和解がなされたとして、シャッツマンのように父親による幼時における被被害体験が息子の発狂の原因になったというように父親の迫害を深刻にとらえる推測を下していない。

此の患者(シュレーバー)の父親コンプレックスが本質的に陽性なニュアンスをもち、実際数年後には、優れた父親との間に一応曇りのない純粹な関係が回復し、同性愛的空想との和解がなされたこと等が、シュレーバーに恢復的な経過を辿らせるに至ったのであろうということである(『症例の研究』, フロイト, 小此木啓吾訳, 日本教文社, 200ページ)。

息子シュレーバーの病気は、神に対する人間シュレーバーの闘争として理解することができる。そしてその戦いにおいては、此の弱い人間が勝利者になるのである。何故ならば彼は、世界秩序を味方に行っているからである（『体験記』61ページ）（『症例の研究』、フロイト、小此木啓吾訳、日本教文社、132ページ）。

換言すれば、息子シュレーバーの病気は、神に対する人間シュレーバーの闘争であり、結局、世界秩序を味方にした、弱い人間シュレーバーがこの戦いに勝ったというわけである。

この場合、「神」と「世界秩序」とが現れてくるが、この両者の関係はどんなものかよくわからない。一般には、「神」も「世界秩序」も同じサイドというか、同一の造物主と考えられるのに、「世界秩序」を味方にして「神」と闘争して世界を救うというのが判らない。

シュレーバーの場合、以上の妄想が、通常みられる形式の救済者空想と関係があることは、医師の報告書からも容易に推定できるであろう。本人は、世界をその悲惨から、或いは目前に迫るその破滅から救うように定められた神の息子ということになっている（『症例の研究』、フロイト、小此木啓吾訳、日本教文社、132ページ）。

息子シュレーバーの妄想は、通常みられる救済者空想と関係があることは、医師の診断書によって、明白であるが、彼の場合は、神の息子となって世界を救うというケタ外れの妄想であると、フロイトはみている。

#### ⑧ 息子シュレーバーの欲求不満

さらに、フロイトは、女性的な願望空想を契機として爆発したあの葛藤の要因を理解するために、息子シュレーバーの現実生活における欲求不満との関連を挙げている。

シュレーバーはわれわれに……欲求満足の欠乏を告白している。彼の結婚は世間では幸せだと噂されたが、実は子宝に恵まれなかった。なかんずく一般男性にとって父と兄弟とを喪った悲しみを慰める役割を果たすはずの息子、満たさずの息子、満たされぬ同性愛的な優しい愛情が注ぎこまれる息子に、シュレーバーは恵まれなかった。……彼の血統は将に絶えなんとしていたのである。しかも彼は自分の系統や家柄に相当の誇りを持ったように思われる。……シュレーバー博士は、「自分がもし女だったら子供を儲けることができたろうに」という空想を抱いたかも知れない。そして過去の幼児期における父親に対する女性的態度に前戻り（退行）する道が開かれたのである。その後、次第に未来に向かって発展していった妄想、つまり彼の非男性化によって、此の世界が、「シュレーバーの精神から生まれた新しき人間たち」で満たされるようになるだろうという妄想は、自分が現実に子宝に恵まれないという事実を埋め合わせるためのものでもあった。シュレーバー自身も不思議に思う「小さな男たち」が子供達を意味するとすれば、われわれには何故彼の頭に此の「小さな男たち」子供達が多勢集まっている光景が浮んでくるのか、よく理解することが出来る。まさにそれは、「彼の精神の子供たち」に他ならない（『症例の研究』、フロイト、小此木啓吾、日本教文社、171～172ページ）。

息子シュレーバーの女性願望を契機として爆発した葛藤のもうひとつの要因として、フロイトは上述のよう、彼の現実生活における欲求満足の挫折をあげている。

それは、彼が子宝に恵まれなかったことである。父と兄弟を喪った悲しみを訴える息子、満たされない同性愛的愛情を注ぐ息子がいなかったことである。そこで、もしも自分が女だったら子供を生むことができたであろうという空想になり、それが幼児期における父親に対する女性的態度に逆戻りする道を開いたのであると、フロイトは解釈する。

## (2) 小此木氏らの病因論

さて、ここで、小此木氏らの「シュレーバー回想録」の分析をとりあげてみたい。

同氏は、上述のフロイトの『症例の研究』の訳者であり、フロイトに関する多くの研究で知られた、精神科の専門家である。

ここでは、同氏の他に、『症例の研究』の改訂版に掲載されている馬場謙一氏の知見ならびに、M.ローベルらの意見の中で、特に息子シュレーバーの病気の原因に関する箇所を中心にみることにした。

### ① 自分を守る闘い—その敗北

独裁的で異常な父親への傾倒とその支配から、どうやって脱却するか、どのようにして男としての自分を確立するかが、彼の課題だったようである。幸いにも彼は次男であったから、その点では比較的自由がきいたのかもしれない。

シュレーバー（息子）の青年期の自己選択はこのような自己確立に彼が一応成功したことを物語っている。

第1に彼は父の職業であった医師の道を選ばず、法律家になり、やがて成功した。

第2に結婚の対象としてアカデミックなシュレーバー家の家風とは、きわめて対照的な家庭の娘を選んだ。つまり妻ザビィは、ライブチッヒの劇場の演出家の娘であり、教養も低く財産もなく、この結婚はシュレーバー家が属する社交界では容認されないものであった。むしろ、ザビィの若さとエロチックな魅力にシュレーバーが誘惑されてしまったという見方をされていたようであるが、シュレーバーにしてみれば、あの権力主義的な父親から自立する必死のたたかいだったのであろう（『フロイト』、小此木啓吾訳、日本放送出版協会、148ページ）。

独裁的で異常な父親への傾倒とその支配からの脱却のための必死の闘いが、息子シュレーバーの人生であり、その挫折が発狂の原因であると小此木氏は解釈している。

次に同氏は息子シュレーバーの発狂にいたる直接の引鉄として、次のようないくつかの挫折をあげる。

すなわち、議員選挙戦の屈辱的大敗、家庭生活での孤立などを挙げている。この選挙戦の大敗による精神的過労が精神病の原因であるという点については、息子シュレーバー自身が『回想録』で自己診断をしている。

### ② 挫 折

帝国議会に立候補と惨敗

ビスマルクと争った結果、14,512票対5,762票という惨敗を喫し、新聞には軽蔑的な記事が載せられ、彼の自信は大いに傷ついた……（『フロイト』、小此木啓吾訳、日本放送出版協会、149ページ）。

社会生活ばかりでなく、家庭生活の方面でも、夫婦仲が険悪になっている。

家庭での孤独

妻はいつになっても子どもをつくることができず、子どもっぽい性格で、離婚話が持ちあがった（『フロイト』、小此木啓吾訳、日本放送出版協会、149ページ）。

シュレーバー家という名門に子宝が恵まれないことが、息子シュレーバーの気持ちの上に重いかけりを投げかけていたことは、前述のフロイトの『症例の研究』の中にも指摘されている

が、選挙戦の大敗や家庭生活での孤立化などの挫折論の指摘は、これがはじめてである。

③ フレヒジツヒに対するほれこみ

第1回のノイローゼは以上のようなトラブルをきっかけでおこったが、こんなさびしきや不安のなかで息子シュレーバーが見出した依存の相手がフレヒジツヒ博士だったのである。

それからの後の8年間はフレヒジツヒ先生に対するほれこみがかれを支えることになった。([フロイト], 小此木啓吾, 日本放送出版協会, 149ページ)。

第1回目のノイローゼは、以上のような、社会的な挫折や家庭におけるトラブルを契機にして起った。そして、そのさびしきや不安の中で依存する支えとなったのは、フレヒジツヒに対するほれこみであったという説明である。

④ 父へのほれこみ (退行)

この時機に、シュレーバーの無意識のなかでは、せっかく頑張って距離を置いたはずの父親との距離がなくなり、たたかひの相手だったはずの父親がフレヒジツヒのほれこみを通して幼い傾倒と依存の対象への逆戻りを (退行) し始めていたのではなかろうか ([フロイト], 小此木啓吾, 日本放送出版協会, 149ページ)。

ところが、息子シュレーバーの無意識のなかで、この時期に、せっかく距離をおいていた闘いの相手であった父親が、フレヒジツヒへのほれこみを通して、依存へと逆戻りしたのではないかと小此木氏は推測をしている。

ここから父との闘いが始まるのである。

⑤ 父との闘いの敗北

ところが、シュレーバーが51歳になった頃、同じように法律家になっていた兄のグスタフが、せっかく判事に昇進したのに、その数週間後にピストル自殺をしてしまった。

そしてシュレーバーはいやおうなしに、シュレーバー家、つまりは、あのファナチック (狂信的) な父の世界に戻らなければならなかった。

しかも、この時期にかれはドレスデンの控訴院長に任命されたわけで、かれの惑いは非常に大きなものになったにちがいない。

しかも妻は、通算6回にわたる死産をくり返し、シュレーバーはどうしても父親になり、自分の家を確立することができないという失意のなかにいた。そして控訴院長に任命された直後に、まるで兄グスタフの霊が乗り移ったように自殺を企て、これに引きつづいて発狂したのである。つまりその発狂は、父とのたたかひの敗北であり、同性愛的な屈服であり、青年期に選択された自己解体の危機を意味していたのである ([フロイト], 小此木啓吾, 日本放送出版協会, 149~150ページ)。

ここで小此木氏はたたみかけるように、息子シュレーバーの発狂いたる諸事情を呈示する。以上のような失意のなかにいた息子シュレーバーが、51歳の時、兄のグスタフの自殺がある。これによって、あの狂信的な父の世界に否応なく戻らねばならなくなる。その上、控訴院長の任命という重大事が重なり、ついに発狂にいたる。

小此木氏は、息子シュレーバーの発狂は、父との闘いの敗北であり、同性愛的な屈服であり、青年期の選択された自己解体の危機を意味していると解釈している。

なお、上記の控訴院長の任命が息子シュレーバーに精神的過労をもらし、発病の原因になったという点については、息子シュレーバー自身『回想録』の中で述べている。



⑥ 対フレヒジツヒ（父親）コンプレックス

小此木氏は、息子シュレーバーが、フレヒジツヒと父親に対する無意識の微妙なかかわり合いについて説明を加える。

「私はかれを愛さない、いや彼を憎む」と、息子シュレーバーがフレヒジツヒに対して思うようになったのは、彼がフレヒジツヒに対し自分をとり戻し、男性的な自己主張をつづけようとする息子シュレーバーの必死の闘いだったという。

しかし、その闘いに敗北して、彼がフレヒジツヒに対し、同性愛的愛情をもつにいたる。これは、多年守りつづけた男性としての自己を失う体験であった。またフレヒジツヒの自分に対する愛情は、ファーナティックな父が自分を引きこもうとする誘惑であった。息子は危くフレヒジツヒ（父）の誘惑に敗けて、自分を見失いそうになった。フレヒジツヒを憎み、迫害者とみなすことによって、男性を守り通さねばならない。狂気の父に対する正気の闘いであった。

シュレーバーがフレヒジツヒに向けた同性愛的感情（彼に愛されたい願望）は、多年にわたって守り続けた男性としての自己を失う体験であった。

「私は彼を愛さない、いや彼を憎む」という心境になったのは、フレヒジツヒに対して、自己をとり戻し、男性的な自己主張をつづけようとする、彼の必死のたたかいだったのである。

フレヒジツヒの自分への愛情は、シュレーバーの無意識の中では、自分の意志を無視してあやしげな姿勢装置を無理強いしたり、モダンタイムス式の食事の与え方をした父親の狂気に自分を引きこもうとする誘惑であった。つまり、シュレーバーの無意識にとって「かれを憎む、何故なら、かれは私を誘惑し迫害するからだ」という訴え（迫害妄想）は、フレヒジツヒに対する自我の目ざめであり、狂気の父親に対する正気のたたかいであった。

シュレーバーにとって、自分の魂を奪ったり、肉体をばらばらにしたり、自我を失わせて、思うようにもてあそんだりする父親（フレヒジツヒ）は妄想の産物ではなかった。それは幼いシュレーバーにとっては現実のものであった。

自分はこの現実を見失って、危うくフレヒジツヒ（父親）のとりこになり、その誘惑に敗けて自分を失いそうになった。

フレヒジツヒを憎み、迫害者とみなすことによって、男性を守り通さねばならない（『フロイト』、小此木啓吾、日本放送出版協会、150ページ）。

⑦ 崩れゆく自我

小此木氏は、最後に、息子シュレーバーが次第に同性愛の誘惑に抗しきれなくなり、かつて父親が保健体操運動をとおして夢みた、誇大妄想的な世界にひきこまれて狂気に圧倒されていく過程を記述している。

いままで、あれほど自分が女性化することを嫌悪し、自嘲していた幻聴は、逆転して、女性への転換を祝福する神の声と変化する。かくて女性となり、父と和解する。

小此木氏は、さらに彼の女性への転換を願う心理の深層には、自分が父親として子宝に恵まれなかったのを、女性に転換することによってその償いをしたいという気持があったと分析している。

しかし、かれの崩れゆく自我は次第に同性愛の誘惑に抗しきれなくなる。そして、かつて父親が保健体操運動をとおして夢みた誇大妄想的な世界にひきこまれてしまう。「自分こそ世界を救済する人間である」という靈感。

しかもそのとき、いままで女性化する自分を嘲っていた幻聴は、女性への転換を祝福する神の声となる。狂

える父との和解が成立する。

しかも父親として、子宝を得ることのできなかつたシュレーバーは、みずから女になり、母になることによって、偉大な創造力を獲得するのである。しかし、そのとき、シュレーバーは、完全に正気を失い、狂気に圧倒されてしまった（『フロイト』、小此木啓吾、日本放送出版協会、151ページ）。

### ⑧ 発病状況の構成要素の総合

このあたりで息子シュレーバーの病因論の結論として、小此木氏による発病状況の構成要素の総合を紹介する。小此木啓吾氏は『症例の研究』フロイトの「改訂版あとがき」において、前（273ページ）にみたように、父シュレーバーの妄想的ともいってよい特異な人物像を画いて、この父に対する息子シュレーバーの態度から、息子シュレーバーの発病の契機を生活史的に捉えようとしている。

息子シュレーバーの発病は、妄想的父親に対する男性として自己主張の破綻が契機になっているという。息子シュレーバーの世界は、父親の妄想的世界に従属するか、自己の現実世界を保持するかの闘いの生活史であった。職業選択、配偶者選択はその一例であったと説明する。それから前にみた、いくつかの挫折が、その闘いを一段と深刻にする。つまり、自己の現実世界の保持に重大な脅威を加え、それらが発病状況の構成要素となっていく仕組について1回目の発病と2回目の発病と分けて総合的な説明をしている。

「生活史的にはシュレーバーの発病は、このような父親に対する男性としての自己主張（男性的抗議）の破綻を契機としている、とみなすことができるようである。つまりシュレーバーにおける父親コンプレックスとは、一方で、男性的抗議、一方で受身的女性的立場への従属という、父に対する、アンビバレントな葛藤であり、そこで起っているものは実際には同性愛というより、父親の非現実的な妄想的世界に従属することとそれを拒否し、自己の現実世界を保持しようとする戦いであったといえると考えられる。

シュレーバー（息子）生活史の中から、父親の支配する世界から脱却し、自己の生活を確立しようとした努力の現われとして、次の事柄があげられる。第1は、自分の生涯のコースとして、父の職業であり、又母方祖父の職であった医師としての道を選ばず法律家としての道を選んだことである。第2は自分の生涯の伴侶としてシュレーバー家のアカデミックな背景とは極めて対照的な娘を妻としたことである。妻ザビイはライブチヒの劇場の演出家の娘であり、資産的にも隔差があり、教養も低く、2人とも結婚はシュレーバー家の属する社交界では容認されないものであった。ザビイはシュレーバーより年下であり、パウマイアーは結婚の動機として「若いエロチックな魅力がシュレーバーを打ち負かした」のだと知っているが、むしろこのような職業選択と配偶者選択に、シュレーバー自身の自己主張と、父によって支配された家族的同一性からの脱出の努力を読み取ることができる。（『症例の研究』、フロイト、小此木啓吾訳、日本教文社、388～389ページ）。

以上、父親コンプレックスから脱却の論理として、職業の選択、妻の出自を挙げ、第1回の心気症の発病契機として、帝国議会における落選、妻との不調和、兄の自殺などをあげている。

第1回目の心気症の発病契機としては、その後の資料によって帝国議会への立候補と落選、妻に対する失望と不満という2つの事柄が挙げられている。当時1880年代は、ビスマルクの専制主義が支配していた時代に当り、シュレーバー（息子）はこれに反対して立候補したのであったが、彼は14,512票対5,762票という大差で敗れ、更に新聞には侮べつな記事が載せられたという。

妻に関しては、夫婦生活必ずしも調和的でなく、子供っぽい妻に対してシュレーバーはしばしば離婚を提唱し、妻の方でも入院中の夫から外泊の知らせが届くと取り乱し、「数日、夫と暮すのは考えただけでも身が細ります。もし本当に帰るのならその間私は家を出ます」と院長宛に書き送る様な状態であった。

ニーデルランドは選挙における落選を、去勢不安の再現として捉えているが、落選と妻の不和を、共に父親

像からの脱出と自己確立のゆらぎとしても考えられるであろう。

第2回目のフロイトのいわゆるパラノイアの発病契機としては、ドレスデンの控訴院長への就任と妻の二度にわたる死産（通産六回）による妻への失望があげられている。

一方、ニーデルランドは、兄グスタフが判事に昇進した数週間後ピストル自殺をした事実をあげ、シュレーバー（息子）も昇進後自殺を試みて妨げられた結果発病したとして、強い家族内同一化現象を指摘しているが、ここでは、兄グスタフの死後家族間に起った役割変化の問題に注目すべきではないか、と思われる。即ち、父の死後シュレーバー家を代表する者は兄グスタフであり、シュレーバーはむしろそれまでよりは気軽に家庭外での自己確立の道に精進し、有能且つ傑出した学者として大成していった訳であるが、兄の死を契機としてシュレーバー家に残された唯一の男性として否應なく再びシュレーバー家に連れ戻され、いわば家霊ともいべきシュレーバー家の内部に閉じこめられ、脱出の自由と機会を剥脱されてしまったと見ることができる（『症例の研究』、フロイト、小此木啓吾訳、日本教文社、389～390ページ）。

これから、あと、小此木氏は、発病状況の構成要素の分析をしている。この部分には、従来にない、新知見が含まれていると述べられている。

この様な発病状況の構成要素を分析してみると、①それまで父に対して現実的な自己を保っていた男性的抗議に対する現実不安。

②子供が得られないことによって父親に対するシュレーバー（息子）の家庭の確立が挫折したこと（特に男の子がえられないことから来る失意）。

③役割変化。これらの要因は、すべてシュレーバー（息子）の努力目標であった現実的世界の保持を脅やかし、その主体性を放棄して、女性的受身的立場に退却する誘因になりえたと考えられる。

シュレーバー（息子）にあつては、この様な状況の中でまず心気症が現われ、そこで生じたフレヒジツヒへの転移は、それまで彼が保っていた現実的な自己の放棄と受身的女性依存の立場に彼を退行させた。

最初に生じた感謝の気持は、患者が医師に向ける社会的なレベルのものだったかも知れないが、その写真を部屋に飾っておくようなほれこみ方は、かつて彼が父に向けていた感情、即ち神のような父を讚美しあがめるという幼児的状況への退行であり、フレヒジツヒ博士による転移性の治癒は、同じ医師として絶対的な力を信じていた父への退行した憧れを、復活せしめたということができよう。

これが更にシュレーバー（息子）の男性的抗議を脅やかし、やがてフレヒジツヒ博士に対する迫害妄想として現われて来たと考えることができよう（『症例の研究』、フロイト、小此木啓吾訳、日本教文社、390ページ）。

以上の病因論は、さきにみたフロイトの分析と基本的な発想においては、大筋で同じと言える。

女性への転換妄想、自分を守る闘い、生活史における挫折、フレヒジツヒ（父）コンプレックス、父との闘いの敗北、救済妄想、自我の崩壊という発病状況の構造要素とプロセスは原則的にはフロイトとほぼ一致するようである。

しかし、こまかくみていくと、フロイトの病因論では、「神に対する人間シュレーバーの闘い」、「息子シュレーバーの至福感」、「女性への変化と神の寵愛」など「神」がしきりに現れてきて、われわれ日本人の感覚ではなじみにくい。しかしフロイト以外の病因論では、「神」はほとんど現れず、生活史を重視し「役割転換」などの新解釈も入り、全体として合理的な説明になっている。またフロイトの病因論で気づくのは「女性への転換妄想」あるいは「同性愛的衝動亢奮の爆発」などを過度に重視した解釈をしている点である。

## (3) M.ローベルのフロイト批判

『精神分析革命』の著者マルト・ローベル (Marthe Robert) はフロイトが息子シュレーバーの症例に取り組むにいたった経緯ならびに彼の『症例の研究』に対するユングの批判について述べている。

## ① フロイトのシュレーバー分析の経緯

シュレーバー裁判所長は精神分析とは、まったく関係がなく、フロイトは彼 (シュレーバー裁判長) が自分の病気で7年前に書いた驚くべき本『回想録』で、彼 (息子シュレーバー) を知ったに過ぎない。……1910年ユングは『ある神経病患者の回想録』という題で刊行されたシュレーバー (息子) の自伝をフロイトに知らせた。

したがってフロイトは弟子の影響ではじめて精神医学の固有の領域に踏みこみ、精神病、精神分裂病、パルノイアといった難問題に取り組んだのだ。

しかしユングは、シュレーバーの症例について、フロイトの分析では確証できない個人的な見解をもっていた。ユングはそれを包みかくさず、ほぼ同じ時期に『リビドーの転換と象徴』の中で不致点をいくつか発表しさえした。これは……科学的概念についての2人の意見の相違の最初の重大な原因になった (『精神分析革命』, M.ローベル, 安田一郎他訳, 河出書房新社, 92~93ページ)。

フロイトは、1910年ユングにより、息子シュレーバーの『回想録』の存在を知り、それを分析した。したがって彼の『症例の研究』は、息子シュレーバー自身を直接、診断したものでないため、分析の資料も不備であり、間接的であることをM.ローベルは述べている。

さらに、ユングが、息子シュレーバーの症例について、S.フロイトの分析では確証できない個人見解を持っていて、それを『リビドーの転換と象徴』に発表したとローベルは述べて、フロイトの上記の『症例の研究』については、相当の論争があったことをほのめかしている。

## ② フロイトのシュレーバー分析の問題点

次に、ローベルは、『回想録』に対するフロイトの分析の問題点について、次のように述べている。

まず、前述のように、フロイトは、息子シュレーバーの分析をした結果を『症例の研究』に発表した。その分析の際、彼は息子の『回想録』しか利用しなかった。しかも、その『回想録』には、個人的な経歴や詳細な自伝的資料が、ほとんど欠如していることをことわっている。

つまり、ローベルは、フロイトの『症例の研究』における息子シュレーバーに対する分析に、相当、致命的な欠陥があることをほのめかしていることがわかる。

S.フロイトは息子シュレーバーの症例を研究するのに、患者の出版した『神経病患者の回想録』しか利用しなかったが、それには個人的な経歴とくわしい自伝的な資料はほとんど完全に欠けていた (『精神分析革命』, M.ローベル, 安田一郎他訳, 河出書房新社, 94ページ)。

『回想録』を公刊するに先だって、息子シュレーバーには、周囲の圧力が加えられたようであるが、彼は、理由を挙げてこの圧力をはねのけて敢えて公刊に踏み切ったのである。その理由をフロイトも『症例の研究』の発表の正当化に引用していると、ローベルは述べている。

シュレーバー博士は今日なお生きているかもしれないし、彼の著書について私のこの覚書 (『症例の研究』

におけるシュレーバーの分析)を苦痛に感じるほど、彼が1903年に述べた妄想体系と関係を絶っているかもしれない(『精神分析革命』, M. ローベル, 安田一郎他訳, 河出書房新社, 94ページ)

フロイトも『症例の研究』における、息子シュレーバーの分析を発表するに際して、かつて、息子シュレーバーが『回想録』を公刊するに当って、加えられたような圧力を感じたのである。しかし、フロイトは、その発表を正当化するために、息子シュレーバーの挙げた「理由」を引用している。

……シュレーバーはこう書いている。「この場合私は、『回想録』の出版に反対しているように思える心のためらいをかくさなかった。ここでためらいというのは、まだ生きている個人に対する考慮である。他方、適任の人が私の存命中に私の身体と個人的な運命になんらかの考察を加えることができるなら、宗教的な真理の認識と科学に価値があるかもしれないという意見を私はもっている。この考慮のまえには、あらゆる個人的な考慮は沈黙してしまうに違いない。

枢密顧問官、教授、フレヒジツ博士の場合にも、私の『回想録』の内容に関する学問的関心によって、万一起るかもしれない個人的な怒りがおさえつけられることを希望している」(『精神分析革命』, M. ローベル, 安田一郎他訳, 河出書房新社, 94ページ)

### ③ フロイトのパラノイア説

シュレーバー(息子)はパラノイアだった。精神科医たちがこの症例に熱中したのは、被害念慮と誇大念慮が豊富だったためと、彼がこの妄想を非凡な洞察力で歴史的なものにしたためだった。

フロイトは、ここでもまた、神経科医の驚嘆は、それを理解する出発点でないことを確認した。彼は心のいちばん奇妙で、いちばん不合理なあらわれも、心の自然な過程から発するという信念をもっていたので、普通なら正しい判断力と、まったく高度の職務を遂行することができるシュレーバーが、なぜ、またどうして、こんなに驚くべき変化を遂げたのかを研究しようとした。

フロイトは15年前、早くからパラノイアの研究を行った。彼の言うところによると、その秘密はフリースとの仲がよかったころ、フリースから教えられたという。

この秘密は、それ以後、精神分析の典型的な知識の一部になった。これはパラノイアは抑圧された同性愛と密接な関係があるというものである。自分が女性に変わり、自分を迫害するフレヒジツ教授から強姦されるという妄想を主としていただいていたシュレーバー(息子)は、この説を裏づける上にあきらかにだれよりも、ふさわしかった(『精神分析革命』, M. ローベル, 安田一郎他訳, 河出書房新社, 95ページ)

フロイトは、息子シュレーバーの症例をパラノイアと診た。他の精神科医たちは、この症例の被害念慮と誇大念慮の豊富さに着目したが、フロイトは、心の最も奇妙で不合理なあらわれも、心の自然な過程から発するという信念にもとづき、息子シュレーバーはなぜ、またどうして、こんな被害念慮と誇大念慮をもつにいたったかを研究しようとした。

たまたまフロイトは以前からパラノイアの研究を行なっていて、ひとつの考え方を抱いていた。それは、パラノイアは抑圧された同性愛と密接な関係があるという精神分析上の古典的知識であった。フロイトは、この古典的知識を息子シュレーバーの精神分析に適用し、自分が女性に変わり、自分を迫害するフレヒジツ教授から強姦されるという妄想を抱いて不安になる。

そして、ここから先は、息子シュレーバーの不安は、フレヒジツ教授に対するほれこみに変化するわけだが、このことは既に、小此木氏などが述べたとおりである。

迫害妄想からほれこみへの変化について次のように犠牲者から女性救済への変化ということでフロイトが説明していると、ローベルは述べている。

④ 犠牲者からは女性救済への変化

M.ローベルは、次のような息子シュレーバーの相違した2つの病気の経過に対応させて、彼の妄想の変化を解説している。

ドレスデンの高等裁判所長に任命された直後に始まったシュレーバー(息子)の病気は、違った2つの病期を経過した。

第1期には、彼は神自身を共犯者にしてしまったフレヒジッヒによって行なわれた恐るべき同性愛犯罪の犠牲者だと想像した。

第2期には、彼は、官能の歓びにみちたあきらめで自分の運命を受け入れたが、この間フレヒジッヒは神にとって代わり、妄想は豊富な宗教的観念と複雑な天地創造説をめぐって構築された。最初にシュレーバー(息子)は、自分は優秀な人間という新しい種族を生み出して、世界を再生させる運命をもった女性救済者だと考えた(『精神分析革命』, M.ローベル, 安田一郎他訳, 河出書房新社, 95ページ)

⑤ 投影—愛と憎

フロイトは妄想という症例形成に関して、いちばん顕著な特徴は「投影」という現象だと強調している。「投影」というのは、主体が以前に抑圧し、内容がいくらかゆがみを受けた内部知覚を、外界からの知覚として感じることである。こうして情動の裏返しが起こる。つまり心の仲で愛情として感じられねばならないものが外部的には憎しみとして感じられる。

事実、経験は、パラノイアの妄想では迫害者はつねに患者が以前非常に愛していた人であることを示している。

フレヒジッヒに対するシュレーバーの憎しみは、この医者に対するシュレーバーの無意識的な愛の裏返しにすぎない。

さらに愛情は嫉妬と憎しみとして外にあらわれるのがこの危険な病気の中心点である。

この愛情は同性の人に向けられるので、恥ずべきもの、許しがたいものになる。

愛情をひき起こす妄想の4つの形式は、愛情を否定するか、すくなくともその主要な命題に反対する方法、いってみると、規則にかなった方法でしかない(『精神分析革命』, M.ローベル, 安田一郎他訳, 河出書房新社, 96ページ)

ローベルは、フロイトが『症例の研究』において特に1章を割いて説明しているパラノイアの顕著な機制のひとつ、まず「投影」を重視し、それに基づいて、フロイトが息子シュレーバーの行動をどのように説明しているかの記述をしている。

「投影」というのは、主体が抑圧した内部知覚を、外界からの知覚として感じることである。こうして心の中で愛情として感じられねばならないものが、外部的には憎しみとして感じられる。つまり情動の裏返しが起こるのである。フレヒジッヒに対する息子シュレーバーの憎しみは、フレヒジッヒに対する息子シュレーバーの無意識の愛の裏返しであるという。

次にローベルは、パラノイアのリビドーの転換を有名な公式で次のように表現している。それは「男である私は、男である彼を愛す」という命題に矛盾する形で現れる。

パラノイアがよく知られた型は『男である私は、男である彼を愛す』という一つの命題にいろいろな点で矛盾するような形をとってあらわれる」と。事実、被害妄想は「私は彼を愛してなくて、彼を憎んでいる」と大声で宣言する。つぎに投影によって、「彼は私を憎むか、迫害している。だから私が彼を憎むのは当然なのだ」となる。

愛され、または他人の愛に追いかけてられていると信じている色情妄想者は、恥ずべき命題の別の要素にとびつく。

それは、「私が愛しているのは彼ではなくて彼女だ——というのは彼女が私を愛しているからだ」という命題である。

矛盾のもう一つの型は、嫉妬妄想で見られる。それはこう言っている。「その男を愛しているのは私ではなくて、彼女だ」と(『精神分析革命』, M.ローベル, 安田一郎他訳, 河出書房新社, 96~97ページ)

#### ⑥ 父親観とフレヒジツヒ観

自伝的資料がないため、フロイトはシュレーバーと彼の父親との関係を詳しく検討することができなかった。

父親は最初にあきらかに恋慕され、憎まれた愛の対象であった。

わかっているのはシュレーバー(父)は医者だというだけだった。

そして医者であるため、彼はフレヒジツヒのように救済者であると同時に殺人者として神の役割を演じることができたのである。

この点でフロイトは、パラノイアの顕著な特徴に注意を向けた。

すなわち、彼によると、ヒステリーが「圧縮」するのに対しパラノイアは「分割」する。実際ヒステリーでは、各症状はその人が愛したいろいろな人に関係がある情動が圧縮した結果おこる。これに反し、パラノイアではすべての情動は、それぞれ肉体化され、その一つ一つがはっきりした妄想観念としてあらわれる。

シュレーバーにとって、迫害者はフレヒジツヒと神に分割され、のちにフレヒジツヒは高位のフレヒジツヒと中位のフレヒジツヒに、また神は下位の神と上位の神に分割された。すべてこれらの人物は、神話や伝説や多神教(これでは、神が信者の多様な感情と願望をいろいろな形で具象化している)で見られるのと同じ関係を持ち、また重要な対応である。

神話、宇宙創造、黙示、予言が解けないほどにこんがらがって入り混っているシュレーバーの妄想は、精神の最高の創造物とまったく同じ機能を果たしている(『精神分析革命』, M.ローベル, 安田一郎他訳, 河出書房新社, 97ページ)

息子シュレーバーにとって父親は憎まれ、愛された対象であり、フレヒジツヒは殺人者であり、救済者であった。このように情動が父親なり、フレヒジツヒなりに肉体化され、しかも、その情動が愛憎のように、妄想観念が分割してあらわれるというパラノイアの特徴にフロイトは注意を向けたと、ローベルは説明している。(つづく)